優秀賞

心の扉を開く授業

香川県立坂出高等学校２年 大西 凛乙

私の将来の夢は先生になる事です。そんな思いを強くさせ、特に心に残った授業はジェンダーについてです。この授業を通じてで、私はそれまで気づかなかった社会の不平等や偏見に目を開かれました。

ある日の授業で、先生は昔から続くジェンダー差別に関する動画を私たちに見せてくれました。この動画は、赤い色鉛筆と青い色鉛筆を例にとり、性別による固定観念や偏見がどれだけ深く根付いているかを描いたものでした。物語はシンプルでありながら、そのメッセージは強烈でした。

動画が終わると、先生は優しい声で質問を投げかけました。「皆さんは、どんな色になりたいですか？」その瞬間、私は胸が締め付けられたような感覚になりました。これまでの自分の人生で、無意識のうちに「女性らしさ」や「男性らしさ」を求められ、それに応えようとしていたことに気づかされたのです。

授業後、自分が本当に望む未来とは何か、そしてそれを阻んでいるものは何か。そんなことを考えるうちに、私は特に、周りにいる人たちのことを思い出しました。母や友人たちが、どれだけ努力しても「女性だから」という理由で不当に扱われることがあると感じていました。その逆の場合もです。「男性だから」といって女性らしい服装をする人を気持ち悪いと言って侮辱する人や、男なんだからくよくよするな！と声をかけている人を何度も聞いたことがあります。どうして、自分が言われたら嫌なことを他の人に言ってしまう人がこんなに多いのか、芸能人だったらネット上に何をかいてもいいのか。同じ人なのにどうして他人を傷つけようとするのか、私は理解することが出来ませんでした。

授業の後の休み時間、友達と一緒に先生に授業がどうだったか話しかけられました。その時、私は授業中に考えたことを先生に素直に話してみました。すると先生も母が私たちのためにどれだけ頑張っているか、友人たちが将来の夢を語るときに感じる不安やプレッシャー。それらが、性別によって不公平に扱われることが原因であること思ったことが何度もあったと話してくれました。先生は普段自分の話をあまりしないのでその時は少しうれしくなって夢中になって話を聞いているとある1冊の本を教えてくれました。

次の日、私は先生がおすすめしてくれた本を探しに図書館に向かいました。先生の話を聞いてもっとジェンダー平等について知りたいという気持ちが強くなったからです。その本は、現代の日本社会におけるジェンダーの問題を描いたもので、多くの実例や統計データが含まれていました。本を読み進めるうちに、私は胸が締め付けられるような思いを何度も感じました。ある女性の話が特に心に残っています。彼女は大学を優秀な成績で卒業し、夢見ていた職場に就職しました。しかし、昇進の機会が来るたびに「女性だから」という理由で後回しにされ続けました。彼女の上司から「女性はどうせ家庭に戻るから」と言われたときの彼女の気持ちを想像すると、言葉にできないほどの悔しさと悲しさがこみ上げてきました。さらに、私は本の中で紹介されていたもう一つの話に涙を禁じ得ませんでした。

それは、家族のために夢を諦めざるを得なかった女性の話です。彼女は家庭と仕事の両立に奮闘していたものの、周囲の無理解や偏見に苦しんでいました。彼女の「自分の夢を叶えるために生きることができたら」という言葉は、私の心に深く刻まれました。この本を読み終えたとき、私は自分自身の考え方や行動を見直す必要があると強く感じました。そして、家族や友人との会話の中で、ジェンダー平等について話すことが増えました。特に、自分自身は幸運にも性別による大きな困難を感じていない一方で、身近な人たちがどれだけ不公平な状況に置かれているかを理解することが重要だと感じました。

この授業を通じて、こんなに生徒の関心に向き合ってくれた先生の偉大さや、「自分が苦しんでいないからといって、それが問題ではないわけではない」ということを再認識出来ました。多くの人々が性別による不公平に苦しんでいる現実を知り、彼らのために何ができるかを考えるようになりました。私は、自分の将来においても、あらゆる差別や偏見をせず、許さない強く優しい子供たちの育成のために出来ることがあるのではないか模索しています。先生の言葉のおかげで、私は社会の不平等や偏見に対する意識を深め、自分自身の行動や考え方を見直すきっかけを得ました。この授業を受ける前と後では、私の視点が大きく変わりました。そして、これからも学び続け、ジェンダー平等を推進するために努力していくのはもちろんのこと、私も生徒に影響を与えられるような先生になりたいと強く思いました。